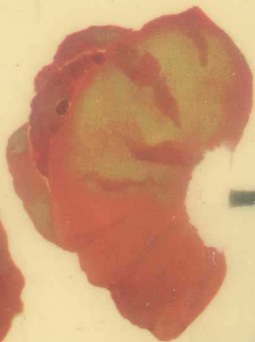
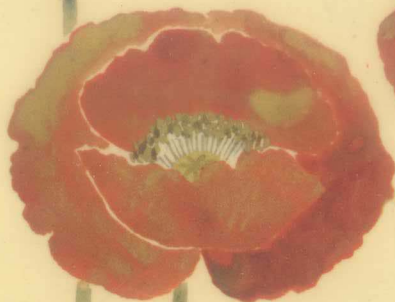


女 坂

円地文子



新潮文

おんな

女

坂

新潮文庫

え - 2 - 2



昭和三十六年四月十五日 発行
平成三年十二月十日 四十八刷
平成四年四月三十日 四十九刷

著 者 円 地 文 子
えん ち ふみ こ

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一
電話 営業 部 (〇三三) 六六 一五 一一
編集 部 (〇三三) 六六 一五 四四
振 替 東京 四 八 〇 八 番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲專堂製本株式会社
© Motoko Fuke 1957 Printed in Japan

ISBN4-10-112702-6 C0193

新潮文庫

女 坂

円地文子著



新潮社版

目次

第一章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七

初花 青い葡萄 彩婢抄

第二章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・八

二十六夜の月 紫手絡 青梅抄

第三章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一七〇

異母妹 女坂

注 解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・犬 養 廉 三七

解 説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・江 藤 淳 二六

女

坂

第一章

初 花

初夏の午後であつた。

浅草花川戸はなかわどの隅田川を背にした久須美の家では、母親のきんが朝からかかつて念入りに掃除した二階の二間ふたまつづきの部屋の床に庭の白い鉄線てつせんの蔓花つるばなを入れて、やれやれこれですんだというように片手に腰をたたきながらくらしい梯子段はしごだんを降りて来た。

玄関の隣の三畳の連子窓れんじまどの下で川から来る明るい水明りに針の目をすかせて、仕立ものの縫糸をとおしていた娘のとしは、花畳紙はなだじを持って部屋へ入って来た母親に声をかけた。

「今、お隣のボンボン（時計）が三時を打つてよ……お客さん、晚いねえ、おつ母さん」

「おや、もうそうなるかい。……どうで宇都宮から乗りつぎの人力車だというから、昼すぎにいつても、夕方にはなろうよ……」

さんは茶の間の長火鉢ながひばちの前に坐すわつて長目の繼羅宇つぎらおの煙管きせるに火をつけた。

「朝から精出したから、くたびれたでしょ。おっ母さん」

としはにっと笑って少しほつれた銀杏返しの髷まげにほそい縫針をすいすいとおしてから、紵こ台の赤い針坊主にさした。それから膝ひざの上の浜縮緬はまぢりめんらしい仕立物をそっと畳紙の上に移して、悪い足をひいて母親のそばへ出た。自分も一休みと思つたのである。

「毎日掃除をしていてもよく塵埃ちみがたまるもんだねえ」

きんはたすきをとった袖口をぴんとのぼして黒縹くろげいず子の衿えりのほこりを潔癖らしく手ではたきながらいう。踏台にのつて欄間から鴨居かみいの長押ながしの溝みぞまでさっぱり塵埃ちみを拭きとつたのが、娘にも言わないが自慢なのである。

「白川さんの奥さんは、何だつて、東京へ出てみえるんだらうね」

としは掃除には母親ほど興味がならしく、針仕事につかれた眼のまわりを指先でもみながらいうのだつた。

「何つたつて、お前……」

きんは不審そうに眉まゆをよせて娘をみた。気の若い母親と病身で婚期を過してしまつた娘は今では親子というより姉妹のようなつながり合いでものごとを話しあうのだつたが、時々としの方がきんより年寄じみた考え方をした。

「東京見物だつて手紙に書いてあつたじゃないか……」

「そうかしら」

としは仔細らしく首を傾けていった。

「あの御新造……暢気に東京見物なんぞに出て見えるかしら……白川さんは、大書記官*とかつて、県庁じゃ県令さんのすぐ下なんですよ」

「そうだよ。大した羽振だつて話だ」

きんはとんとん火鉢の縁で煙管をはたきながらいった。

「出世したもんだよね。前に東京府のお勤めで隣にいた時分にやあんなになる人とは思わなかった……もつとも、その時分から、きれる人じゃあつたけれどね」

「だからさ、おつ母さん」

と、としは母親の肩をたたくような声でいうのだった。

「その忙しい旦那を残して、お嬢さんと女中をつれて一、二カ月がかりの東京見物なんて、何だかあんまり悠長でおかしいわ。お里があるわけじゃなし……」

「そうだよ……あの御新造も、白川さんと同じ熊本ものだもの……けど、お前……」

ときんは、想像がつかないらしく、娘の顔をまじまじみて、

「まさか離縁ばなしでもあるまい……白川さんからの手紙にそんな模様はちつともないもの

……」

「そりやそうでしょうよ」

としはいいながら、占いでもするような眼で火鉢の猫板に頬杖をついている。きんはこれ

までもこの足の悪い娘の予感することが妙にぴったり当るので、時々わが子ながら気味の悪くなることがあった。市子いちこの口寄せ*でもみるような眼でしばらくとしの顔を見てみると、こしは頬杖をはずして、

「わからないわ」

と首をふった。

白川倫ともしが九つになる娘の悦子と女中のよしをつれて、久須美の家の前に俤くるまから降りたつたのはそれから一時間ばかりたつた後であった。

取りあえず沸かしてあった風呂ふろに入つて、旅の塵埃ちりぼこりを洗い落した後、倫は福島の名産だという干柿ほしがきや会津塗などの外にきんにもとしにもそれぞれ似つかわしい反物を土産に持たせて、階下の茶の間へ来た。

縞しまものに黒縮緬*の五つ紋の羽織*をどつしり着て、衣紋えもんつきのいい撫肩*の胸を少しそらせるようにして坐っている倫の様子には四、五年見ない中うちに、めつきり官員*の奥さんらしい容態さなわが具そなつていた。照りのいい黄味がかつた顔色の額やが少々ひろく、厚肉の形のよい鼻を中心に眼も口もゆっくり間隔をとつて置かれているので、神経質な印象はどこにもなかったが、はれた眼蓋まぶたの下におされたように細く見ひらかれている眼には、ちようどその眼瞼まぶたを蔽おほいにしているいろいろな表情の流出を、食いとめているような一種のもどかしさがあった。白川夫婦が

東京に居たころ二年近く隣家に住まつて懇意になつていながら、きんなどが倫に氣の置けるところのあるのもその重たい眼ざしと崩したところのない言葉つきや動作のせいなのであつた。それは、勿体ぶつているとか、意地の悪いとかいうのとは違つているので、批難しかねるのだつたが、江戸っ子のきんに簡単にいわせれば、氣のさげない人とでもいうのだらうか。しかし若い時よりも良人の地位が重々しくなつた今では、倫のそういう堅くるしさもなかなか買目があつて立派に見えるときんは思つた。

悦子はまだのび揃わない髪をお煙草盆にゆつて、眼なれない川の眺めが珍しいらしく連子窓の方へばかり眼をやつていた。

「大そう綺麗におなりになりましたねえ」

ときんがお世辞でなしにいつたほど悦子は色が白く中高の美しい顔立ちだつた。

「お父さまによく似ていらつしやる」

ととしもいつた。ほんとうに悦子の頬の肉のうすい品のよい顔や首の長い身体つきは倫よりも白川に似ていた。倫は悦子にはこわい母親であるらしく、

「悦」

と倫が一声低くよぶと、悦子はすくんだように母の傍へ来て坐つた。

「よく思いつて出ていらつしやいましたこと。旦那さまも県令さん同様の御威勢だといひますから……奥さまのお心づかいも大変でござんしょう」

ときんはせかせか煎茶せんちやをいれてすすめながらいった。

「いいえ、もう私どもお役向きのことは一向わかりませんので……」

と倫は口訥くちくつなについて、白川さんは県ではお大名暮しだそうだときんが人の噂うわさにきいてゐる羽振のよい自慢話などは、穂も見せなかった。

盛り場の開けた話だの、髪形の少し見ない中にちがったことだの、新富座*の芝居はどんな狂言*を出しているかだの、東京を中心の世間話にしばらく花が咲いた後で倫は、

「私も、今度はゆっくり遊んで来いとゆるしが出ましてね……まあ、その中には少し用もまわっていますのですけれど……」

といって、傍にゐる悦子の髪の赤い櫛くしをちよつときし直した。何げない言葉つきだったのできんは少しも気にならなかつたが、としはやつぱり何か倫が大切な用事をもっていることを感じた。しつとりと落ちついてゐる倫の身体に何か常でない錘おもりが沈んでゐるように見えた。

その翌日出不精なとしが、昨日の土産の礼心れいごころに悦子を観音さまの御詣ごまいりに誘うと、よしも悦子も喜んでつれ立って出かけた。

「帰りに仲見世*で絵草紙*でも買ってお上げよ」

ときんは娘にいいつけて門まで送つたが、その足で二階へ上つてゆくと倫が次の間に坐つ

「持つて来た葛籠つづみから衣類を出し入れしていた。白い雲のちらばっている空が川水に映つて、
盆ぼんの坐まっている二間つづきの座敷も白っぽい明るさにひろびろしていた。

「まあ、早速に、御精が出ますこと」

「いいながらさんが縁側に膝をつくつと、倫はゆっくりした動作で着物を一枚一枚葛籠に収
めながら、

「悦が大きくなったので、あれを持つてゆくこれを持つてゆくなど申して……旅をするにも
めんどろになりまして。……あの御隠居さん……いま御用はおありでしょうか」

「といった。恰度ちやうど膝を立てて葛籠の中へ悦子の黄八丈あわせの袷あはせを沈めるようにおいている時なの
で倫の顔は見えなかった。きんはもとより世間話をしようと上つて来たのであつたが、倫に
さういわれると何だか上つて来たのがきまりの悪いような気分になった。

「いいえ……奥さま何か御用でございますか」

「いえ、お忙しければ、今にも限らないのですけれど、悦が出かけておりますし……まあ、
ちやうと、こちらへおいで下さいまし」

倫はやっぱりゆつたりした調子でいつて、座敷の縁に近いところへ座布団ざぶたんをもつて来た。

「あの……実は今度の滞在中に、是非あなたに御骨折願たい度いことがございますのです」

「おや、何でござんしょう。私のようなものでお間にあいますことなら、何でもいたします
けれど……」

さんは勢よくいつてみたけれど、倫の行儀よく膝に手を置いて伏眼になっている顔から何が語り出されるのか想像は出来なかった。倫のゆっくりした長めの頬のはずれから口尻くちじりにかけて、うつすら微笑ほほえんでいるらしい微かな線が浮んでいた。

「妙なお話なのですよ」

と倫はちよつと鬢びん*のあたりへ手を上げながらいった。身だしなみのいい倫の髪の毛はいつもきれいに取上げられているのだったが、倫は一筋のみだれ毛をも見苦しがつて時々髪を撫でて見る癖があった。

何か女についてのことらしいときはその時気づいた。白川は東京にいるころにも女出入りが多く倫が心配したことをしているの、いまのような地位になり登れば猶更なおさらそういう事柄ことづからはあるに違いなかった。でもそういう内情を推察したように立入るのは、都会人の作法に反しているの、さんはやつぱりおぼおぼしい表情をつくっていた。

「何ですか、どうぞ、御遠慮なしにおっしゃって下さいましよ」

「ええ、どうせお頼みしなければならいことですから……」

倫の口もとにはやつぱり女面おんなめん*のようなほのかな笑いが漂っていた。

「あの実は、小間使を一人抱えて帰り度いのでございます。年は十五から十七、八ぐらい……出来れば堅い家の娘で……縹緞きりようのいい子でないと困ります」

終りの言葉をいった時口もとの微笑がはつきりして、厚い眼瞼の下の眼がその笑いと凡およそ

ふさわしくない生真面目な光を湛えた。

「ああ、なるほど……」

そういつた自分の声がいかにも軽薄に聞えて、きんは下を向いた。それだけきけば先日としの予感したことははっきりのみこめるのだった。

うなずくとも溜息ともつかず息を深く吸ってからきんはいつた。

「やっぱり、もうああいう御身分におなりなさると……そういうものが要りますんでしうねえ」

「どうも……やっぱりねえ、端が承知いたしませんのでねえ」

それは嘘だった。倫は胸の中に噴上げて来る感情を力一杯おさえつけおさえつけていた。夫が妾を新しくかかえようとしているのはもう一年ほど前からの計画だった。白川にとり入っている下役達は倫が酒の席などにいるとよく、

「奥さん、このくらいのお邸に、お腰元が不足していますな」

とか、

「大書記官も多忙すぎますよ。ちつと変った枕で楽寝をさせてお上げなさい」

とか立入った口をきいた。部下に甘くみられる事の大嫌いな白川が、妻にそういうことをいう時だけ、それらの無遠慮な男達をたしなめもしないのを見ると、倫には夫が彼らの口をかりて自分に相談をかけているのだと思えた。